



(生野)

兵庫・安坂・城の堀遺跡

- 1 所在地 兵庫県多可郡中町安坂字城の堀
- 2 調査期間 第六区調査 一九九七年(平9) 八月
- 3 発掘機関 中町教育委員会
- 4 調査担当者 宮原文隆
- 5 遺跡の種類 集落跡・居館跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代中期～室町時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

安坂・城の堀遺跡は、中町中央平野のやや北よりの中央部に位置している。調査は農業基盤整備・道路建設に係り数次にわたって実

施された。農業基盤整備以前の圃場は、約五〇×九〇mのややいびつな長方形の範囲を一段低い帯状の圃場が取り囲むような状況呈していた。これは堀の存在を暗示し、また字名にも「城の堀」が遺存していることから、この地に居館跡

が存在することが推定されていた。

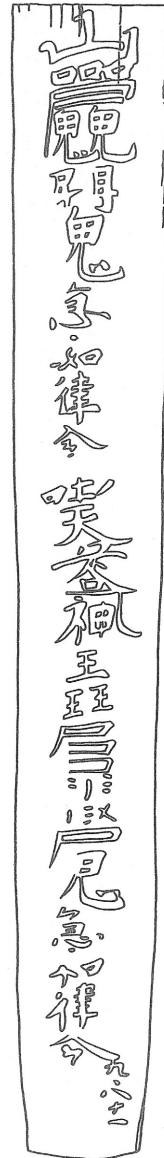
調査の結果、弥生時代中期・終末期、古墳時代中期、飛鳥時代、奈良時代、平安時代、室町時代の遺構・遺物が非常に多く確認された。しかしながら近現代の瓦粘土採掘によって、多くの遺構が削平され、全体像を把握することを困難にしている。

この遺跡の特徴は非常に多くの溝がみられることである。特に、弥生時代後半に掘削され、埋没しつつも奈良時代後半頃まで遺存した幅5mを越す大溝は、先の瓦粘土採掘を免れており、多くの木製品をはじめとする遺物が出土した。主なものとしては、七世紀の犁をはじめとする農具、奈良時代後半の祭祀用具(人形代・馬形代・

鍬先形代・齋串など)二〇〇点以上、墨書土器(「宮田西」「下古川」「古飯廣田」「□依」など)二〇点以上がある。

今回紹介する呪符木簡二点は、東西約五〇m、南北約九〇mの規模の室町時代の居館をめぐる堀から出土した。方形にめぐる堀の東辺及び西辺の北寄りには、対になるように張り出し部が位置し、ここに居館外部との出入り口(虎口)を設けていたことが推定される。特に、東辺の虎口には橋脚が立ったまま遺存していた。木簡が出土したのは、この堀東辺の虎口の堀法面である。居館全体でみれば、ここは鬼門の方向となる北東部にあたり、同時に出土した数点の羽子板状木製品との関わりも注目される。

8 木簡の釈文・内容



(1)

(1)

「符籙」急々如律令

咄天冠神王(符籙)急々如律令

九々八十一

430×56×2 011

(2)

・「符籙」急々如律令

・「」 □ □

(180)×(27)×4 081

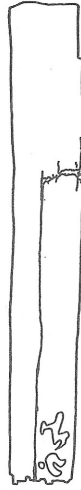
(1)は、ほぼ完存している。上部二字は墨もよく遺存しているが、それ以下の文字は木質に残る凹凸によって辛うじて判読できる。裏面には墨書は全くみられない。

(2)は、下端及び左側が欠損している。墨は比較的よく遺存するが、調査時の傷によって損なわれている。表面の字体は(1)に酷似する。

木簡の解説に際しては、奈良国立文化財研究所の渡辺晃宏・山下信一郎両氏の教示を得た。



(2)



(2)表

9 関係文献

中町教育委員会『安坂・城の堀遺跡』(中町文化財報告一六一九
七年)

(宮原文隆)